

中国における最古級の瓦とその分布について

齊 藤 希

目 次

I. はじめに	13
II. 中国最古級の瓦	13
III. 瓦のバリエーションと系譜関係	18
IV. 最古級の瓦の分布状況とその背景	19
V. おわりに	20

論 文 要 旨

中国における瓦の歴史は、西周時期までさかのぼると考えられており、陝西省周原遺跡の建築址出土瓦が、従来最も古い瓦であった。しかし、近年の考古学的調査の進展により、中国では約 4000 年前の新石器時代（龍山文化期）に瓦がすでに出現していたことが明らかになってきた。本稿では、現在まで知られている新石器時代（龍山文化期）から西周時期までの瓦の形態や出土状況を概観し、瓦という新たな建築部材が成立した地域とその背景、普及の在り方を検討した。

最古級の瓦のうち平瓦に関しては、西周やそれ以降に普及する横断面弧形のタイプと、新石器時代の甘粛や陝西で見られる横断面凹字形の 2 種類が存在する。春秋時代の秦の瓦には、後者の横断面凹字形があり、従来はこの瓦は特殊な形態で瓦生産の試行錯誤の段階を表したものとされていた。しかし、近年の資料からみるとこれらの系譜は新石器時代の甘粛や陝西の瓦に求められる。

現在の資料状況を鑑みると、中国ひいては東アジアにおける瓦は中原地域ではなく、新石器時代の黄土高原に起源する。黄土高原では新石器時代から窖洞式住居が頻繁に使用されていたことや、芦山峁遺跡の大型建築が土壁で強固な造りであった事例などからみて、瓦が当該地域で出現した背景には、建物としての上部構造の特徴や強度が影響している可能性がある。それ以外に、降水量や他の建築部材の供給量の違いに起因することもあると考えられる。起源地での出現の諸要因や、初期王朝期に瓦が普及するに至るプロセスについては、今後のデータの蓄積を待ち、さらに他の物質文化との比較をふまえて検討を深めたい。

齊藤 希（さいとう のぞみ）

奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員

I. はじめに

中国における瓦の歴史は、長らく西周時代までさかのぼると考えられてきた。中国における瓦の出現に関しては、これまで多くの研究者らが考察をおこなってきたが、最近まで中国では、陝西省周原遺跡の西周時期の宮殿建築で出土した筒瓦（丸瓦）と板瓦（平瓦）が、系統的な変化をたどることのできる（中村 2019）最も古い瓦であった。しかし、2000 年以降には西周に先行する商代の都の一つである鄭州商城で、平瓦とみられる土製品が出土するなど、より古い時期の事例報告が増加した（向井 2012）。そして、近年の考古学的調査の増加と進展により、さらに時期をさかのぼる瓦の出土事例が報告され、約 4000 年前の新石器時代（龍山文化期）には、瓦がすでに出現していたことが明らかになりつつある。

本稿では、現在知られている西周以前の瓦の形態や出土状況を概観したうえで、簡単にではあるが新石器時代の特定の地域で瓦が出現した要因について、検討をおこないたい。なお、極力網羅的に資料を収集してはいるものの、原資料へのアクセスが限られている部分もあり、遺漏があるかもしれない。その点をご寛容願いたい。

II. 中国最古級の瓦

ここでは、新石器時代から西周時期までの瓦として報告されている、あるいは瓦である可能性が議論されている資料を遺跡ごとに紹介する。それぞれの遺跡位置は図 1 に示す。

（1）新石器時代

新石器時代の資料は陝西省、甘粛省の遺跡から発見されており、基本的に龍山文化期に属する。龍山文化期は、中原地域で城郭集落が出現し始め、拠点集落と周辺の集落との間で集落間ネットワークが形成され、その後の初期王朝期の社会変化の萌芽がみられる段階である。一方で瓦が出土する地域としては、中原の西北部寄りの、黄土高原地域に集中している点が興味深い状況である。この分布傾向が生じる背景については、後ほど述べることとする。

・芦山峁遺跡（図 2）

陝西省延安市宝塔区に所在する芦山峁村西北の山上に位置する遺跡で、2014 年以降の大規模考古学調査により、大型版築基壇や院落式建築、300 基あまりの墓などが発見された（陝西省考古研究院ほか 2019）。大営盤梁院落一号院とされる建物址周辺から、約 100 点の瓦が出土した。出土コンテクストとしては、建物址地面直上や倒壊した建物の堆積中が主で、そのほか地層中からも数点見つかっている。丸瓦は泥質灰陶で、長さ 40cm、横断面は半円形を呈し、両端縁は幅の広さに差異があり平面は台形を呈する。狭端縁以外の縁辺部には粘土帯による装飾（付加堆紋）が施されている。内面はナデ調整、外面は多くがナデ調整で、一部縄紋（縄目タタキ）の痕跡がみられる。完形に近い形に復元できた個体は 4 点あり、それらを含む破片資料から、丸瓦出土枚数は約 60 枚にのぼる。平瓦も泥質灰陶で、平面は長方形を呈する。両側の長辺は折れ曲がっており、短辺の一边は片側の角が斜めにカットされており、もう一方の短辺には粘土帯の装飾（付加堆紋）が施される。残存状態の良好な個体では、長さ 47cm、幅 27.6cm、厚さ 1.4cmをはかる。完形に近い形で復元できた個体は 2 枚あり、それらを含む破片資料から、平瓦出土枚数は約 70 枚とされる。瓦の属する遺構の年代は龍山文化期（4400 ～ 4500 年前）に相当する。



図 1 遺跡位置図

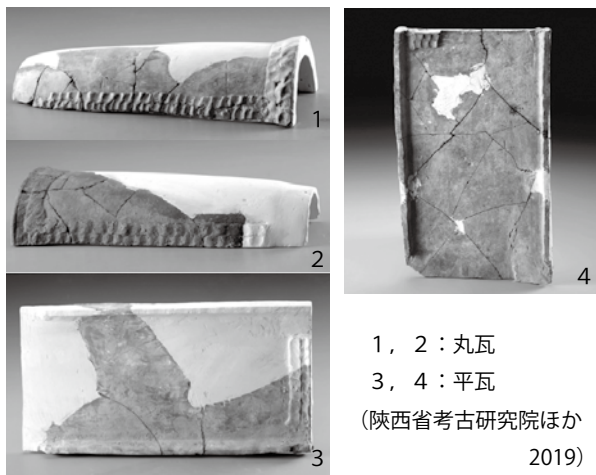


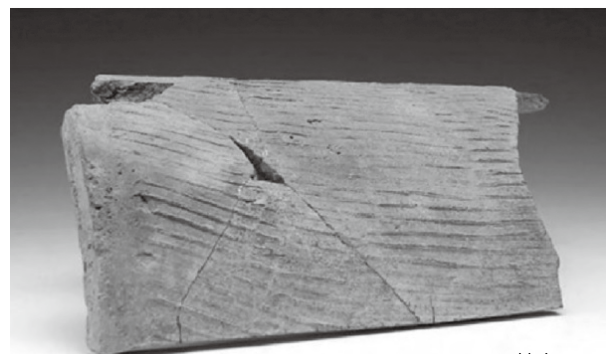
図2 芦山遺跡出土瓦

・石炭遺跡（図3）

陝西省神木県に所在する石炭遺跡は、石積みの城址などからなる龍山文化期から二里頭文化期にかけての複合遺跡である（陝西省考古研究院ほか 2013）。皇城台東壁北側斜面の廃棄堆積中から 200 点あまりの瓦の破片が出土した。丸瓦で最小個体数は 13 枚であった。瓦の表面には藍紋（平行線状タタキ）が施されており、厚さ最大 0.7～1.3cm、最大長 34cmをはかる。皇城台の頂部にあった大型宮殿建築の屋根に葺かれた瓦である可能性が高い。瓦の属する遺構の年代は 4300～4100 年前頃に相当するとみられる。

・陶寺遺跡（図4）

山西省襄汾県に所在する陶寺遺跡は、城址や墓地からなる大規模な集落遺跡である。2002 年の発掘調査の際、宮殿区と呼ばれるエリアの IT5026 と IT5126 トレンチから計 101 点の「陶板」が出土した（中国社会科学院考古研究所山西隊ほか 2005）。発掘担当者は、陶板が出土した当初器蓋の一種と推測したが、資料の整理を進める中で、一種の建築物の表面を装飾する材料の一種という認識が出され、陶板瓦説が提起されるに至った（李乃勝ほか 2007）。陶板は挟砂灰陶で、表面には平行線状タタキや縄目タタキが施され、裏面には漆喰か泥が付着していた。形状には 2 種類あり、A 型は平行四辺形か台形を呈し、端部に近い部分に円い孔が穿孔される。B 型は等脚台形で底辺がわずかに弧を描く。その他の建築に関連する廃棄物と共存して出土する場合が多く、このような出土コンテクストと形状・胎土・物理的特性を

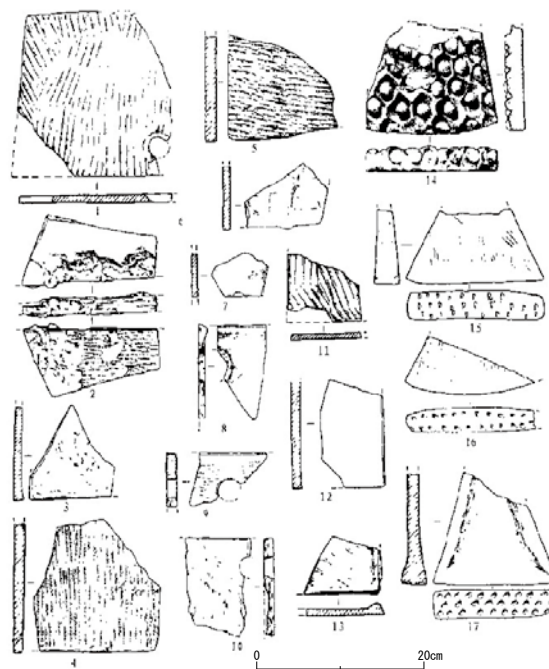


(趙東2019)

図3 石炭遺跡出土瓦

踏まえて、発掘担当者は A 型が平瓦、B 型が垂木を保護する土製品（垂木瓦）であると推測した。なお、時期としては陶寺文化中晩期に相当し、紀元前 2100 年よりやや古い。この陶寺遺跡の瓦と考えられる遺物については、瓦とする説に懐疑的な研究者もいる。

陳春君は、陶寺遺跡の陶板は平らで雨水を導く溝状の形状を持たない点と、厚さが 1～2 cm では重ねて使用するのには耐えられない薄さである点などから、平瓦としての使用は不可能であったとする（陳春君 2014）。その上で、出土した遺構では他に煙突の破片や陶水管、炉の破片などの炊事場に関する建築材料が出土していることから、この陶板は炊事場で使用された磚である可能性を提示した。また、劉軍社も、2005 年 11 月刊行の



(中国社会科学院考古研究所山西隊ほか 2005)

図4 陶寺遺跡出土陶版

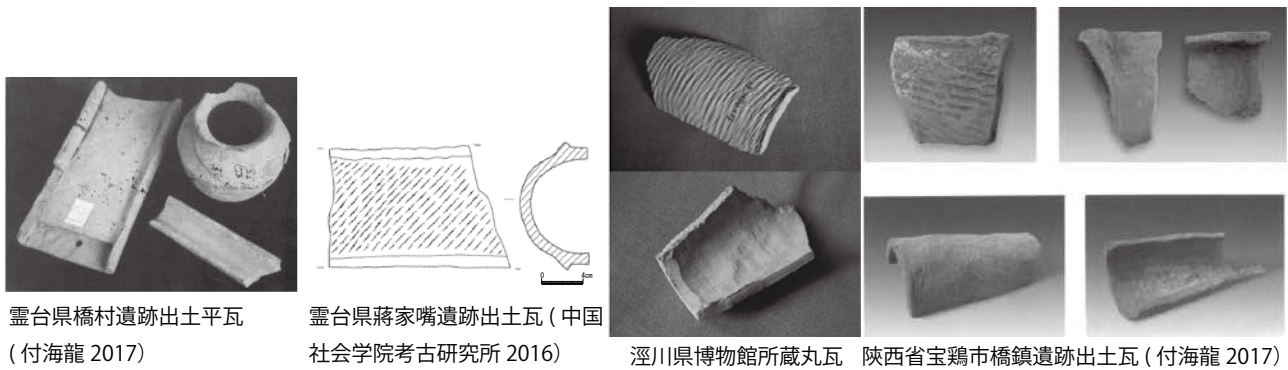


図5 甘粛・陝西省内の新石器時代瓦

『中国文物報』において、陶寺の陶板は磚の基本的要素を備えており、磚とするのが適当であるとした（劉軍社 2005）。

・霊台橋村（図5）

甘粛省霊台县橋村では、瓦が一枚出土している（宋江寧ほか 2018）。胎土は橙紅色を呈し、短辺に段差がつけられ、上下の瓦とかみ合うようになっている。長辺端部が上方に折れ曲がり凹型を呈する平瓦で、一方の短辺近くには円い孔が穿孔されている。新石器時代の齊家文化に属しており、約 3900 年前に相当する。

・霊台百里鎮稔溝村蔣家嘴遺跡（図5）

2013 年に溪河流域の調査をおこなっている際、2 枚の丸瓦が採集された（中国社会科学院考古研究所 2016）。挾砂紅陶で、平行線状タタキが施され、表面両側には粘土帯を張り付けて稜を成している（断面凹字形）。

・涇川（玉都鎮郭家咀村採集品）（図5）

甘粛省涇川県の博物館には、玉都鎮郭家咀村で採集された泥質紅等の丸瓦（丸瓦）の破片が収蔵されている（付海龍 2017）。粘土紐成形で作られ、外側には平行線状タタキ、側面にはへう切りの痕跡がある。時期は龍山文化期併行に相当し、先述した橋村出土瓦と同様の時期とみられる。

・宝鶏橋鎮（図5）

2009 年 9 月に、宝鶏市陳倉区橋鎮村から平瓦と丸瓦を含む瓦数点が出土している（宝鶏市考古研究所

2011）。このうち平瓦は弧状のものと凹槽形（横断面凹字形）の 2 つに分けられ、多くが新石器時代の半地下式住居内の白灰面（床面）上部廃棄後堆積土内から出土した。胎土は泥質紅陶で、平行線状タタキが施される。平瓦の完形品は見つかっていない。丸瓦は粘土紐成形で作られ、長さ 26cm、直径 12cm、厚さ 1.2cm、狭端縁と広端縁があり、端部は平らである。年代は霊台橋村と同時期（約 3900 年前）とみられる。

（2）初期王朝期

初期王朝期とは、二里頭文化期から二里岡文化期、殷墟期、そして西周期を指す。いわゆる夏王朝から商（殷）、周の各王朝が盛衰したとされる時期であり、宮殿や宗廟といった政治的・宗教的な中心建物が出現し、都城が形成される。二里頭文化期以降になると、瓦が出土する遺跡は陝西省と河南省に多く、加えて四川省の三星堆遺跡のような、地方における中心的集落に相当する遺跡でも、瓦の使用がみられるようになる。

・二里頭遺跡（図6）

河南省偃師市二里頭遺跡の宮殿区では、包含層から 2 枚の丸瓦が出土した（中国社会科学院考古研究所編 2014）。泥質灰陶で、両端部は子母口（段がつく形）、外側は縄目タタキ、内壁は麻点（点状の当て具痕）がある。側面には切割痕跡が見える。残りの良い丸瓦では、長さ 66.3cm、直径 23.8cm、厚さ 1～1.4cmをはかる。報告では陶水管としているが、包含層出土であり、形態は他遺跡の丸瓦と基本的に一致していることから、瓦である可能性も十分ある。時期は二里頭文化第四期晩段（紀元前 1530 年前後）である。

・三星堆遺跡（図7）

四川省広漢市三星堆遺跡の宮殿区でも、平瓦と丸瓦を含む瓦が数点出土している。形態は様々で、基本的に挟砂灰黒陶で、粘土紐成形、素面（タタキ・装飾などの器面調整なし）、端部近くに円形の穿孔があるものが多い。このうち、端部が鋸歯状の瓦と凹槽形（横断面凹字形）の平瓦は残存状態が非常に良い。前者が残存長39.2cm、幅16.8～21.1cm、後者が長さ48.4cm、幅29.2cm～32.8cmである。調査担当者はこれらを瓦と確定してはおらず、“瓦形器”や“板形器”などと呼称するが、少なくとも建築材料であるとしている。基本的な形態は陶寺遺跡や橋村遺跡などの瓦に類似しており、基本的には瓦であると考え。時期は夏・商前期平行に相当する三星堆第二期に属する。

・鄭州商城（図8）

河南省鄭州市の鄭州商城の宮殿区では瓦の残片が何度も発見されている（河南省文物考古研究所2007）。基本的に泥質灰陶で、形態は比較的小さく、長さ約30cm、幅10～20cm、厚さ1～3cmに収まる。片方の端部は器壁が薄くなり、もう一方の端部は厚くなる。外側には

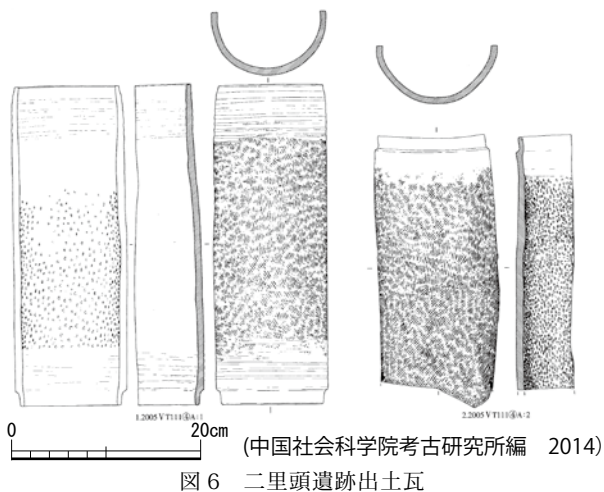


図6 二里头遺跡出土瓦

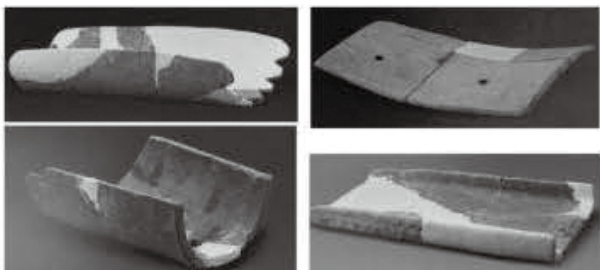


図7 三星堆遺跡出土瓦

縄目タタキが施されるものが多いが、磨きのみか無紋もある。内側には一般的に麻点があり、側面は竹木片による切割痕跡が残る。全体に比較的粗雑な作りといえる。発掘担当者は、宮殿建築の柱穴の中や廃棄された壕・溝、灰坑から出土していることを根拠として、平瓦は主に宮殿の棟の部分に使われたほか、建物内の木柱の根本を囲い保護するように使用されたりしていたとする。時期は商早期晩段で、紀元前1400年前後に相当する。

・棗樹溝脳遺跡（図8）

陝西省淳化県の棗樹溝脳遺跡でも、比較的多くの平瓦の破片が出土した（西北大学文化遺産与考古学研究中心ほか2012）。泥質灰陶が主で、外側には縄目タタキ、内側は磨き・ナデ調整で、厚さは1cm前後、瓦を固定するための瓦釘や環耳などの付属部位がある。年代は先周時期（商代晩期）にあたる。これらの先周時期の平瓦は、形態上周原遺跡や豊鎬遺跡、周公廟遺跡などの西周早期のものと基本的に一致している。

・周原遺跡

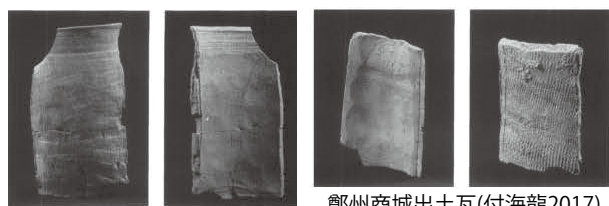
周原遺跡は、陝西省の岐山県と扶風県にまたがって存在する西周時期の遺跡で、歴史上では周の古公亶父が邠から遷都した、いわば周人のはじまりの地である。ここからは、多くの地点で瓦の出土が報告されている。

○岐山鳳雛建築遺跡（陝西周原考古隊1979、傅熹年1981a・1981b）（図9）

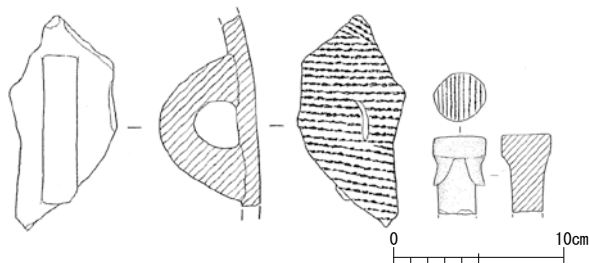
鳳雛甲組遺址は、西周早期の左右対称の四合院建築址である。ここから出土した瓦は、一種類の形状のみで、円筒を4分割した弧状をなす。凸面か凹面に半円環状か円柱状の突起（環耳あるいは瓦釘）が付く。数量が多くないことから、屋根の一部分のみ、すなわち大棟や隅棟、軒先などに限定的に使用されたと考えられる。

○扶風召陳遺跡（陝西周原考古隊1981）（図10）

版築基壇面の上面にあたる包含層から瓦片が多く出土した。出土層位によって、早期・中期・晩期に区分できる。この遺跡の調査成果から、西周早期から晩期に至るまで周原の一部の建物では瓦が使用されており、特に中期には技術的な発展をとめない瓦の普及が進んだとされる。早期：紅褐、灰、黄灰色の色調で焼成温度が比較的低かった。両面と側面に縄目タタキの痕跡が残る。すべて



鄭州商城出土瓦(付海龍2017)



棗樹溝腦遺跡出土瓦片

(西北大学文化遺産与考古学研究中心ほか 2012)

図8 鄭州商城と棗樹溝脳遺跡出土瓦

平瓦であり凹面中央に短い錐状の瓦釘がつくか、凸面中央にキノコ形の短い瓦釘がつく。

中期： 出土資料の大半がこの時期に属する。この時期に平瓦と丸瓦に分化する。大きさは大・中・小の3種類が存在する。平瓦の瓦釘は1つか2つ、あるいは無い場合があり、凹凸面どちらかに付く。瓦釘は大多数が円柱状か円錐状である。数量は少ないが、一部に凹面に半円環状の突起（環耳）がつく大型の瓦も存在する。

晩期：出土数が非常に少ないが、報告によると、厚さが薄くなり規格化が進む。

なお、製作技法はいずれも共通しており、粘土帶積み上げ技法により成形された円筒を分割して作られる。

○雲塘西周建築遺跡と齊鎮西周建築遺跡（図 11）

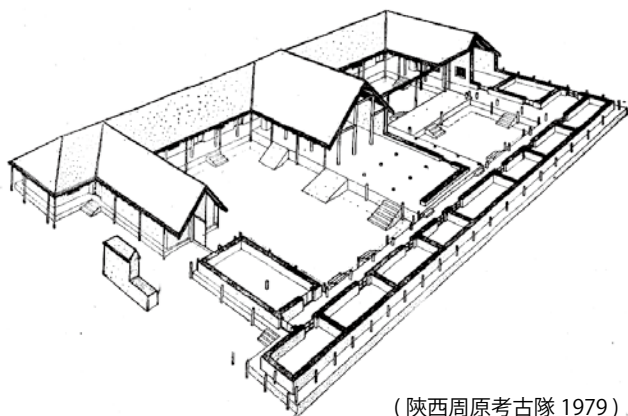
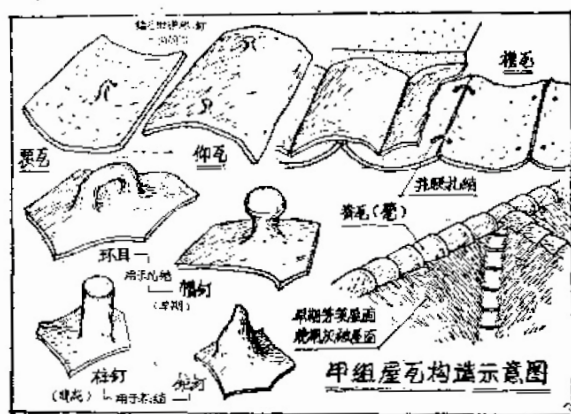
雲塘村と斉鎮村では、1999年から2000年にかけての発掘調査で建築群が検出された（陝西周原考古隊

2002)。雲塘村の遺構群では、正殿とみられる版築基壇（F1）と東西の付属建物（F2・F3）を平面凸字形の土壁がとり囲んでおり、南に門（F8）が開く。壁の西側にもさらに一棟の建物址（F5）がある。このうち、南門である F8 両側の囲壁南側で、生活面直上をおおうようにして丸瓦や平瓦の破片が多数出土した。瓦片の分布範囲は東西約 20m、南北 16m におよぶ。また、F5 の西南側と東南側でも、生活面直上から瓦片の堆積が帯状に見つかった。丸瓦と平瓦両方を含み、完形に近い遺存状態であった。建物の廃棄時に堆積したものとみられる。この他包含層からの出土もある。建築群の時期は西周晩期に相当する。

齊鎮村で見つかった建物址は、中心的建物とみられる版築基壇（F4）とその南側に位置する門（F9）、および門の東側で一部残存が確認された版築基壇跡（F7）からなる。このうちF7を切るようにして掘りこまれた灰坑（H9）の埋土に、平瓦片が含まれていた。建築群の時期は雲塘と同じく西周晩期に相当する。

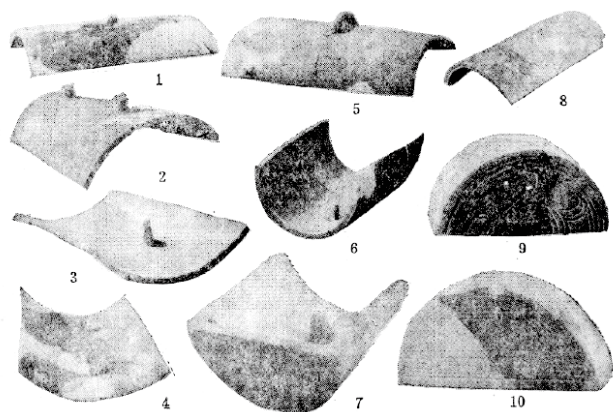
上記2つの建築群から出土した瓦については、一部の残存状況の良い遺物について詳細に報告がなされている。平瓦は、長さが48～50cm、幅が28～37cm、厚さ1.6cmをはかる。泥質灰陶で、片面に瓦釘を持つ。丸瓦は、平面台形を呈しており、狭端面には玉縁状の段差がある。側面まで縄目タタキが及ぶ個体もある。長さは24～42cm、幅は14～20cmと個体差が大きい。縄目タタキのほかに対称旋回紋や波状紋を施すものもある。

F5の版築基壇の上では瓦当も見つかった。泥質紅陶で、瓦当の文様には、西周晩期の青銅器にもしばしば使



(陝西周原考古隊 1979)

図9 周原遺跡鳳雛甲組建築址出土瓦模式図と建物復原図



1～5・8:平瓦 6:棟瓦 7・9・10:軒丸瓦 (陝西周原考古隊1981)

図10 周原遺跡召陳建築址出土瓦

用される弧形の回字紋が刻まれる。直径24cm、瓦当高さは13cmである。

出土位置に関して注目すべきは、囲壁の内部にある正殿とみられるF1や東西の付属建物F2、F3の周辺からは瓦片が発見されておらず、囲壁の外側にあたる門の南側に瓦片が集中していた点である。西周晩期には周原遺跡において瓦の使用が相当普及していたと考えられるが、主体的な建物では瓦を使用せず、付属的な建物で使用するのである。この現象について、徐良高と王巍は、『呂氏春秋』や『左伝』の記述を例に挙げ、それらの記述によると周人は明堂や宗廟などの建築物ではあえて瓦を使用せず装飾性も控えて茅葺きにすることで儉約を表したことから、当該建物群もそれに相当すると述べている(徐良高・王巍2002)。

○流龍咀村発見の陶窯跡(図12)

周原遺跡内において、鳳雛甲組建築址のある鳳雛村

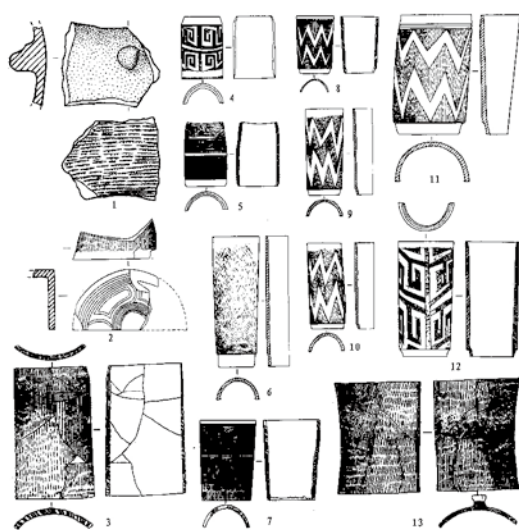


図11 周原遺跡雲塘齊鎮建築址出土瓦と遺構平面図

の西約2.5kmに位置する流龍咀村で、西周時期の窯跡が2基発見された(巨万倉1989)。2基は間が50cmと近接して造られており、奥行1.35～1.5m、幅1.5～1.75mのほぼ同様の規模を持つ。下半部のみの残存であるが、構造もおそらく2基ともに二層構造の窯とみられる(向井2012)。1号窯では、瓦片が多く出土しており、2号窯からは罐や盆などの土器の破片が多く出土している。報告で巨氏は1号窯が瓦専用窯、2号窯が土器専用窯であるとしているが、窯の形態や規模に違いはなく、それぞれの焼成時にある程度同じ器種をまとめて焼成していた結果、出土遺物に偏りが生じた可能性があるだろう。

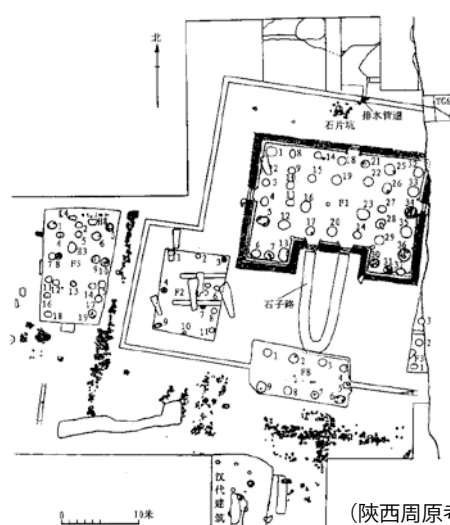
西周時期の瓦の時期的な変遷を示した羅西章によると、西周前期の瓦はすべて平瓦状であり、西周中期以降にようやく平瓦と丸瓦が明確に区別され、半円形の瓦当をもつ軒丸瓦が出現する(羅西章1987)。西周後期の瓦の形態は基本的に中期からの継続で、厚さが薄くなる、玉縁がはっきりするなどの特徴の違いが生じるとともに、規格の統一化が進むとされる(向井2012)。

Ⅲ. 瓦のバリエーションと系譜関係

(1) 平瓦

平瓦は、円筒を分割して成形される断面弧形の形式と、比較的平坦な長方形あるいは台形で断面凹字形の形式の2タイプが存在する。

ところで、陝西省鳳翔県の雍城馬家庄1号建築址からは、比較的多くの瓦が出土しており(図13)、春秋時代



(陝西周原考古隊 2002)

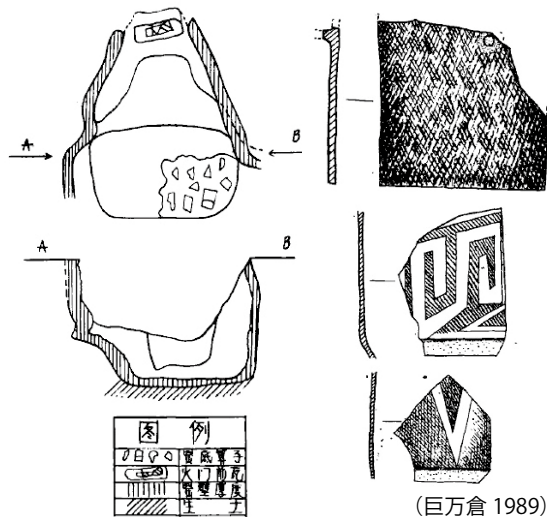


図 12 流龍咀村発見の陶窯と出土瓦

の秦の瓦の様相を知ることができる（陝西省雍城考古隊 1985）。このうち平瓦は、大型と小型の別のほか特殊な形態の個体もあるが、基本的にすべて横断面凹字形で、表面は縄目タタキ調整か三角幾何学紋の装飾が施される。長さは 44～76cm、広端面幅 28cm 前後、狭端面幅 24～27cm、高さ 6cm 前後である。また、報告によると瓦はいずれも粘土帶積み上げにより円筒あるいは方柱に成形したのちに分割して瓦の形態に仕上げているという。

春秋時代の秦の平瓦は、断面形状が凹字形を呈しており、断面弧形の西周時代の平瓦と異なる。向井氏は、この違いを秦代の瓦がまだ試行錯誤の段階であったためであるとした（向井 2012）しかし、近年の新たな資料により、秦の平瓦の凹字形に近い形態の平瓦が、新石器時代に既に存在していたことが分かった。すなわち、陝西省延安市の芦山峁遺跡や甘肅省靈台県の橋村遺跡、宝鶏市陳倉区橋鎮遺跡から発見された断面凹字形の平瓦が、春秋秦の平瓦の祖型にあたる可能性があるだろう。しかしながら、両者をむすびつけるには、時期的な隔たりが大きく、今後間を埋めるような瓦の発見があることを期待したい。

（2）丸瓦

丸瓦は、新石器時代末期に出現した当初から、円筒を半裁して成形する基本的形態と技法は共通する。西周中期には大きな画期があり、これ以降玉縁が明確になり、瓦当の使用が始まる。従来は丸瓦と平瓦の分化もこの時期に開始するとされていたが、芦山峁遺跡でも丸平両方

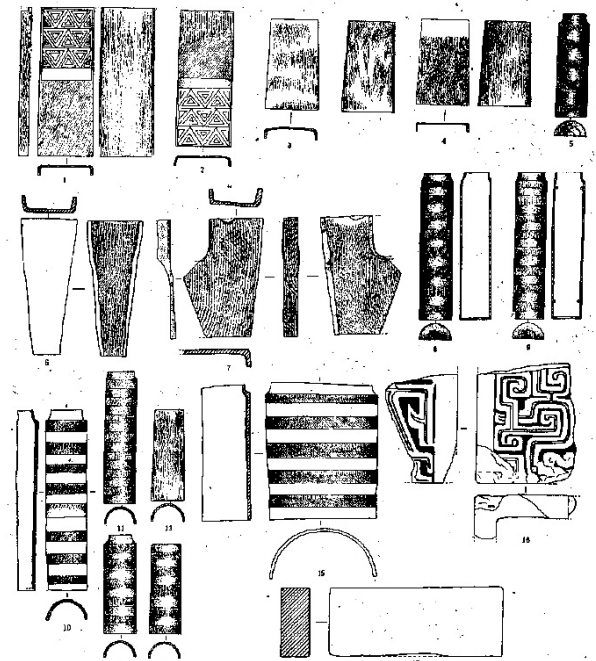


図 13 鳳翔雍城馬家庄一豪建築群出土瓦

が出土していることから、新石器時代にはすでに覆瓦と仰瓦の作り分けが生じていた可能性がある。

丸瓦は、陶水管との峻別がしばしば困難であり、最古級の丸瓦の一部には瓦である証拠に乏しい事例も存在する。陶水管との区別をいかにおこなうかについては、改めて別の機会に検討をおこないたい問題である。

IV. 最古級の瓦の分布状況とその背景

これまで見てきたように、中国では新石器時代晩期に瓦が出現するが、現在までの最古級の瓦の分布からみると、中国ひいては東アジアにおける瓦の起源は中原地域ではなく、黄土高原に求められる可能性が高い。その要因については現時点ではっきりしないものの、考える要因として、降水量の違いといった気候条件、建物の下部構造の強度などを挙げておく。前者については、当該時期の雨量の変化や地域差に関するデータが不足しており、黄土高原の地域の降雨量は不明である。石峁遺跡などで古環境についての調査が進展中であり、今後のデータの蓄積が期待される。後者に関しては、彭小軍が最古級の瓦は窖洞式建築に使用されていた可能性を指摘しており（彭小軍 2020）、筆者もこれを支持したい。黄土高原では新石器時代から、黄土を掘削して造る半地下式の土壁の住居（窖洞式住居）が頻繁に使用されていた。木材を組み合わせて建てる掘立柱式建物や竪穴式建物に

比べ、上部の重みに対する耐久性は比較的高い構造といえる。また、芦山峁遺跡の大型建築は窑洞式住居ではないものの、土壁で強固な造りをしている。当該地域では従来からこのような土製の建築構造が一般的であったため、上部に木や草などの有機質の建築部材を載せたうえに、さらに重量のある土製の屋根材である瓦を葺くことは、比較的容易だったのかもしれない。

V. おわりに

本稿では、近年報告が増加した新石器時代の最古級の瓦の事例を整理し、その分布が陝西や甘肅など、中原地域にとって北西部の黄土高原に偏る傾向があることを確認した。今後はさらなる資料の増加を待ちつつ、初期王朝期の中心的建物で瓦が採用されるに至るプロセスを、ほかの物質文化の動態を合わせて検討したい。

謝辞

最近の瓦の出土事例については、呂夢氏（金沢大学）に多くのご教示をいただいた。厚く御礼を申し上げます、感謝する次第です。また、本研究はJSPS 科研費JP21K00984、JP21H05370 の助成を受けたものである。

参考文献

大脇潔 2002「西周と春秋の瓦」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』
河南省文物考古研究所 2007「鄭州商城宮殿區商代板瓦發掘簡報」『華夏考古』第3期
何鷺 2019「二里頭 2005VT111 出土の陶水管“筒瓦”解」『華夏文明』第2期
巨万倉 1989「岐山流龍咀村發原西周陶窯遺址」『文博』第2期
周原考古隊 2002「陝西扶風縣雲塘・齊鎮西周建築基址 1999～2000 年度發掘簡報」『考古』第9期
西北大学文化遺產与考古学研究中心・陝西省考古研究院・淳化縣博物館 2012「陝西淳化縣棗樹溝遺址先周時期遺存」『考古』第3期
徐良高・王巍 2002「陝西扶風雲塘西周建築基址の初步認識」『考古』第9期
陝西周原考古隊 1979「陝西岐山鳳雛村西周建築基址發掘簡報」『文物』第10期
陝西周原考古隊 1981「扶風召陳西周建築群基址發掘簡報」『文

物』第3期

陝西省考古研究院ほか 2013「陝西神木縣石峁遺址」『考古』第7期

陝西省考古研究院ほか 2019「陝西延安市芦山峁新石器時代遺址」『考古』第7期

陝西省雍城考古隊 1985「鳳翔馬家庄一号建築群基址發掘簡報」『文物』第2期 pp.1-29

宋江寧・馬明志・常經宇 2018「龍山時代陶瓦的相關問題研究」『中国社会科学院古代文明研究中心通訊』第33期

付海龍 2017「我国早期陶瓦發現概述」『磚瓦文化』第4期

中国社会科学院考古研究所編 2014『二里頭 1999～2006』文物出版社

中国社会科学院考古研究所 2016「2013 年達溪河流域考古調查報告」『西部考古』第12輯

中国社会科学院考古研究所山西隊ほか 2005「山西襄汾陶寺城址 2002 年發掘報告」『考古學報』第3期

趙東「陝西芦山峁和石峁遺址出土陶瓦的意義」『磚瓦文化』第5期

陳春君 2014「陶寺陶板為板瓦說存疑」『衡陽師範學院學報』第35卷第4期

陳薇「瓦屋連天一關於瓦頂与木構体系發展的關連探討」『建築學報』第2期

中村亜希子 2019「東の造瓦ことはじめ」『アジア地域研究』2号

傅熹年 1981a「陝西岐山鳳雛西周建築遺址初探一周原西周建築遺址研究之一」『文物』第1期

傅熹年 1981b「陝西岐山鳳雛西周建築遺址初探一周原西周建築遺址研究之一」『文物』第3期

宝鷄市考古研究所 2011「宝鷄發現龍山文化時期建築構件」『文物』第3期

彭小軍 2020「史前陶瓦与窑洞式建築的關連性蠡探」『文物春秋』第6期

向井佑介 2012「中国における瓦の出現と伝播」『古代』第129・130 合併号

羅西章 1987「周原出土陶制建築材料」『考古与文物』第2期

李乃勝ほか 2007「陶寺遺址出土的板瓦分析」『考古』第9期

劉軍社 2005「陶板為磚說」『中国文物報』2005 年 11 月 2 日第7版

劉軍社（宝鷄市考古研究所）2011「宝鷄發現龍山文化時期建築構件」『文物』第3期